

# 高品質小麦の1t獲りを目指す

あの機械  
この技術

# 私の取扱説明書 4

北海道十勝平野の東側に位置する池田町に、小麦づくりのプロフェッショナルがいる。今年のキタホナミは反収780kgで、高品質を維持。輪作を回して確実に収穫するだけでなく、離れた圃場では連作にも挑戦する。播種前の圃場づくりから適期を逃さない管理作業に至る独自のアレンジの賜物だ。



北海道中川郡池田町  
**武智唯浩 氏 (58)**

【経営データ】  
 ■年間売上：約7000万円  
 ■経営面積：畑作51ha（小麦24ha、ジャガイモ<メークイン>9ha、ビート9ha、小豆9.5ha）  
 ■労働構成：本人・妻・息子・嫁  
 ■売り先：主にJA（数年前に2年ほど小豆を商系に出荷していた）



右上：武智農場の小麦畑（7月8日撮影）。圃場は一部を除けば、ほぼ3km圏内。輪作体系は小麦→小麦→（収穫後に緑肥）→小豆→ビート→ジャガイモの順。左上：スガノ農機製の「なでなで君」。作業幅は20.4m。「なでなで」を始めてからは一度も倒したことがない」と話す。往復で1回、3週間で12回行なう。止め葉期前の小麦に刺激を与えるとエチレンガスが発生して茎が丈夫になり、徒長を抑える効果がある。当時100台生産されたが、現在でも使っている農家は少ない。左下：麦なで作業用のトラクタ、MF145（昭和45年製）。車高が高く機体が軽いので、麦畑に入りやすく踏圧が少ない。修理しながら使い続けて

3月	4月	5月	6月	7月	8月
・融雪剤散布	・追肥	←なでなで君→ ・防除／追肥 ・植物成長調整剤	・防除 ・追肥 ・防除	・防除	・収穫

武智農場で今年8月に収穫した秋小麦の反収は、24haの平均で約780kg（粗原で852kg、歩留まり91・6%）。品質もほぼ上位に格付けされ、好成績だった。

武智唯浩氏は、品種がキタホナミに切り替わった1年目から870kgという反収を叩き出した。翌年は660kgと振るわなかったが、昨年は816kg、そして4年目にあたる今年も高収量を維持する。「ホクシンでは反収が600kgを下回ることもあったから、キタホナミの方が作りやすいかな。収量より品質重視。100%を狙うと失敗するから80%を目指している」と話す。

同氏は高校を卒業してすぐ18歳で就農し、冬季の間は深川市にある拓殖大学北海道短期大学に3年間通った。父の代で分家した同農場の経営を委譲され2代目を継いだのは、29歳の頃。当時の面積は27haと比較的大きく、豆類の栽培に重きを置いていた。ハーベスタがない時代には、ジャガイモやビートなど根菜類はなかなか増やせなかったという。



左：中古スプレイヤ（東洋農機）を今年から2台体制（トラクタはクボタのDREAM21とMD87）にした。うね幅によって小麦＆ジャガイモ用（作業幅：20m）とビート＆

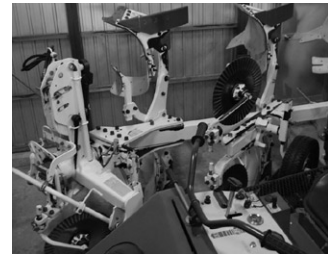
小豆用（作業幅：18m）で分けている。前輪の前に取り付けけた「分草アタッチ」は1つの油圧で両側のローラが上がる。右：ターボドロップのノズル（取扱：クダ農機）は泡状の薬液を下に吹き付けるドリフト低減タイプ。規定の希釈倍率の薬剤を1,500ℓタンク一杯で約2haに散布（約70ℓ/10a）。使用する薬剤の絶対量を減らす散布方法だが、問題なく効くという。



昨年導入した、MF6480 Dyna-6（145馬力）。フロント3点リンク、トリンプ社製のGPSガイドシステム、オートステアを取り付けた。畝切り、ジャガイモの植付け、小豆の播種などの作業で活躍。「振り返る姿勢が減り、身体が楽になった。次の日も続けて作業ができる」と導入効果を評価している。



▲今年納入したプラソイラ（スガノ農機）。全体を軟らかくすると踏圧の影響を受けるため、あえて爪の間隔を広げて55cm→60cmに。



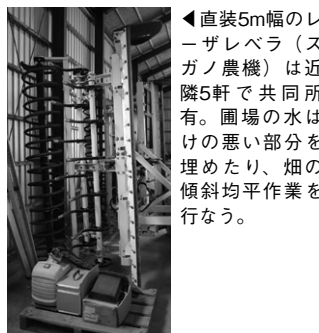
▲20インチ3連のリバーシブルプラウ（スガノ農機）。毎年、全圃場を深さ40cmほど起こす。ジャガイモ収穫後、小麦播種前は天候次第で忙しい。



▲パワーハロー HR4004（クーン社）。カゴローラは大径で土抜けの良いレムケン製品に交換。「土がこなれて、仕上がりが違う」と話す。



▲レーキUM410（ストール社）は反転と集草両用。回転が速く、麦わらを傷めずにまとめて散らす。競馬場向けに麦わらロールを出荷。



◀直装5m幅のレーザーレベラ（スガノ農機）は近隣5軒で共同所有。圃場の水はけの悪い部分を埋めたり、畑の傾斜均平作業を行なう。



▲管理作業機HSTMD14（ヤンマー）は小豆用のカルチ用。みのる産業のRT30と2台体制。雑草の状況に合わせてアタッチを選ぶ。

前作	2011年8月			9月	10月	11月	12月	2012年1月	2月
▲キタホナミの栽培暦▼	・ 収穫	チヨッパ + 堆肥 (6t/10a)	石灰窒素 + プラソイラ	パワーハロー	・ 播種 (10kg/10a) + 施肥	・ 除草剤散布	・ 雪腐防除		
小麦				プラウ + パワーハロー 3回					
ジャガイモ				・ 収穫	プラソイラ + パワーハロー 2回				

その後、徐々に拡大し、積極的に機械を導入した。現在の経営面積は51haで、秋小麦、ジャガイモ（生食用メークイン）、ビート、小豆を輪作する。そのうち自作地は45haで自宅周辺の3km圏内にある。

小麦づくりは40年目のベテランだ。同農場で活躍するのは「なでなで君」。徒長を抑えて丈夫な茎を育てる目的で用いる。1回1往復で12回かける。播種前にプラソイラによる排水対策を行なってプラウで起こす。

今年は「全体的に葉色が薄く、花がダラダラ咲いた」ため、尿素だけでは足りないかと判断して、6月にNA550を10a当たり20kgほど追肥した。毎年、気象条件は異なるが、圃場を観察しながら、適期作業のタイミングを逃さない。安定した品質や収量を維持する秘訣だ。さらに、作業記録を必ず残し、15年分の作業日誌をホームページに公開している。

自宅から離れた圃場では試験を兼ねて、小麦の連作を5〜6年続ける。今年、反収が800kgを超えた輪作畑に比べて、連作圃場は600kg台だった。「何事も経験してみないと分からないからね」と同氏は口にした。今秋、連作圃場は小麦播種前に暗渠を施工。来年の「1t穫り」を目指して、新たな挑戦が始まった。

（加藤祐子）